

ルース・バラクラフ 著、<sup>キムウォン</sup>金元 & ノ・ジスン 訳  
『女工文学—セクシュアリティ、暴力及び再現の問題』

(フマニタス、2017年)

루스 배러클러프 저, 김원 & 노지승 역, 『여공 문학 — 섹슈얼리티, 폭력 그리고 재현의 문제』

(후마니타스, 2017년)

本書は、オーストラリア国立大学 (Australian National University) のアジア・太平洋学大学 (College of Asia & the Pacific) の傘下にある韓国研究所 (Korea Institute) で、韓国労働史とジェンダー研究部門を担当している、ルース・バラクラフ教授の著書だ。著者は、1989年夏に韓国を訪問して出会った10代の女工たちの文学的熱情に魅了され、大学でも彼女たちが書いた手記と自叙伝、小説などに関する研究を続けた。著者は1920年代から1990年代までの韓国文学における女工たちについての研究で、2004年にオーストラリア国立大から博士学位を受けたのだが、本書はその博士学位論文をもとにしており、2012年に出版された本の韓国語翻訳本である。

本書の1章「女工の発明」においては、急進的雑誌、新聞に載せられた読者の投稿、記事、意見欄、匿名の詩、罷業公告文等を検討しながら、女性が大多数であった1920年代の工場がどのように性暴力の場として理解されていたのかを見せようとした。

2章「誘惑の物語」においては、1920～30年代のプロ文学運動期に登場した女性労働者階級の再現をめぐる問題を検討したが、これらの作品において、女工は資本主義の性的スケープゴートとして描写された。しかし、この中で苦痛を受ける女工たちの複雑な経験は、誘惑と救いの話として単純化される等の問題を見せたりもしたが、このような点は、自身が女工生活をした作家、<sup>カンギョンエ</sup>姜敬愛 (장경애) の長編小説、『人間問題』(『東亜日報』連載、1934)において、克服の可能性を見せたりもした。

3章「ソウルへ向かう道」においては、1930年代以後の文学作品から消え、1970年代に再登場することになる女工たちの形象について、女性労働者階級の作家である<sup>チャンナムス</sup>張ナムス (장남수) の『取られた職場 (빼앗긴 일터)』(創作と批評、1984)、<sup>ソク</sup>石チョンナム (석정남) の『工場のともしび (공장의 불빛)』(日月書閣、1984)、<sup>ソン</sup>宋ヒョソン (송효순) の『ソウルへ向かう道 (서울로 가는 길)』(形成社、1982)等の手記を例に挙げ、検討した。冷戦期を克服して再び復活した労働政治が、自伝的手記という新しいジャンルを通して権威主義的国家に対応する過程で、苦痛を受ける女工が核心的な道德的象徴として活用されもした点が明らかになった。

4章「スラムのロマンス」においては、1980年代に軍部独裁の打倒を目標として提示していた労学連帯の核心要素として、肉体労働者と知識労働者の間の関係に焦点を当てようとした。この労学連帯の解明のために、著者は3章に引き続き、張ナムスと石チョンナムの手記を扱いながら、階級分割(差別)が個別の女性に及ぼした効果に対する彼らの批判を、階級間の恋愛、文学を通じた慰労、家族との離別に関する話と関連させて説明する一方で、彼らの手記が既存の文壇と社会に対する挑戦と見なされた点

を指摘した。

5章「少女の愛と自殺」においては、女工出身の作家、申京淑<sup>シンギョンスク</sup>（신경숙）の長編小説『離れ部屋（외판방）』（文学トンネ、1995）を扱った。1990年代、文学と労働運動において急進主義が衰退したことにより、時代との妥協を模索する、いわゆる「後日談文学」という新しい流れが生み出されたのだが、この『離れ部屋』は、その中の一つだ。著者は、1990年代が進むにつれて、この小説を最後に女性労働者は大衆文化から再び消えることとなり、その座を中間階級の専門職の女性が占めることになることと述べた。

著者は、この本を通して、1920～30年代の知識人たちの目に映った女工たちから、1970～80年代に直接ペンを持ち、自らの人生を語った女工たちに至るまでの歴史を総合して、フェミニストの歴史学者の観点から、そして文学批評家の観点から「韓国女工の系譜学」を完成させた。性・ジェンダー・労働の問題を、文学と歴史の境界を行き来しながら、長い間穿鑿してきた著者は、急速な産業化の外傷を持つ存在として、工場の労働搾取と性暴力とを関連させて形成化してきた彼女たち女工が、一見（ブルジョア的）女性性が欠乏した存在であり、「軽い」存在として形象化されてきた過去の伝統の中で、どのように自己だけの声を上げる存在として立ち上がることができたのかを見せてくれるという点で、意味のある成果を生み出した。

現在、著者は韓国の初期共産主義者の女性たちの生涯史を取めた本、『Red Glamour: Korea's Early Communist Women』を執筆中だ。

## 梨花人文科学院 編

『近代知識とジャーナリズム』（ソミョン出版、2016年）

이화인문과학원 편, 근대 지식과 저널리즘 (소명출판, 2016년)

本書は、<sup>梨花</sup>梨花女子大学の傘下にある梨花人文科学院の人文知識叢書の中の一つで、人文知識の形成と再構成の動力としての「近代ジャーナリズム」に注目しながら、東アジアの知識の場での知識の生産・拡散・大衆化の地形を新しく描こうとした。この企画は、韓国文学だけを主題としたものではないが、「ジャーナリズムが近代の知識の場をどのように変化させたのか？」という質問を通して、知識の場での文学的実践の様相もまた、より立体的に探索できると考える。

第一部「近代ジャーナリズムと東アジアの知識の場の転換」においては、東アジアの知識の場でジャーナリズムが制度化されるなか、知識の場で広がった言説（discours）<sup>ディスカール</sup>の競合、すなわち学術性と大衆性、前近代性と近代性だけでなく、知識人主体の浮上とそれによる知識の場の変化および言説の形成について照明しようとした。

章清<sup>ジャンチン</sup>は「晩清時期の中国の新媒体による知識の場の形成」において、晩清時期に発行された『時務報』、『知新報』、『湘学新報』、『新民叢報』、『新青年』、『大公报』等のような近代の新聞・雑誌が近代的知識の場を形成していく重要な媒介であったことに注目した。金宣姫（김선희）<sup>キムソンニ</sup>は「前近代文献の公刊と近代的呼名—近代啓蒙期の知的公認の変化」において、李瀾（이익）<sup>イイク</sup>の『星湖僊説』、朴趾源（박지원）<sup>パクチウォン</sup>の『燕巖集』、<sup>チョンヤギョン</sup>丁若鏞（정약용）の『欽欽新書』、『牧民心書』等のような、18～19世紀の著述が20世紀初盤に個人または出版機関を通じて公刊されたことにより、近代的実践が遂行された点を指摘した。<sup>チャテグン</sup>車泰根（차태근）は「近代知識—ジャーナリズムとアカデミズムの拮抗関係」において、近代のジャーナリズムが伝統学問の代わりに、中国社会の主要知識の生産方式として浮上し、以後ジャーナリズムの批判を通して新しい近代的アカデミズムが提起される過程を探った。鈴木貞美は「日本の近代ジャーナリズムで誕生した新しい2ジャンル—1920年と1930年代の日記と随筆の概念を中心に」において、1920～30年代に「日記文学」というジャンルが池田龜鑑<sup>いけだきかん</sup>によって新たに構築され、小説以外の散文を指称する「随筆」が大衆読者層と共に登場する過程を記述した。金真禧（김진희）<sup>キムジンニ</sup>は「近代ジャーナリズムと『文学-知識』の性格と位相—1910年代～1920年代の李光洙（이광수）<sup>イグァンス</sup>の文学論を中心に」において、ジャーナリズムというプリズムを通して、李光洙の文学を再考しながら、「文学の価値」（1910）、「文学とは何か」（1916）、「文士と修養」（1921）、「文学講話」（1924）等を分析した。<sup>キムスジャ</sup>金寿子（김수자）は「『新女性』女性記者の女性言説の構成方式—1920年代～1930年代の許貞淑（허정숙）<sup>ホジョンスク</sup>と宋桂月（송계월）<sup>ソンギェウォル</sup>を中心に」において、1920～30年代初の代表的な女性雑誌であった『新女性』の許貞淑と宋桂月の記事が、女性問題の認識と女性解放の模索方案を構成していく言説の方式を考察した。

第二部「近代ジャーナリズムと知識大衆化の諸様相」においては、ジャーナリズムの浮上が知識形成の主体と流通方式にどのような変化をもたらしたのか、新聞・雑誌等の近代メディアは、知識の共有・

疎通・拡散にどのように関係したのか等についての考察を通して、近代知識の固有性と歴史性を再発見しようとした。

鄭宣景 (정선경) は「晩清 4 大小説の新聞雑誌の連載と文学の場の転換」において、晩清時期に新聞・雑誌等によって、小説が中心ジャンルに転移する過程と、その小説が伝統的文章を書く方式と文体に及ぼした変化を分析した。朴淑子 (박숙자) は、「植民地の朝鮮で『様々なこと』が扱われる方式—『別乾坤』の大衆性と女性性」において、1926年に創刊され、「知識」と「楽しみ」を同時に享有し、大衆娯楽のパラダイムを再構成しようとした大衆娯楽雑誌『別乾坤』が、漸次通俗性の嗜好に傾斜する過程を記述した。申河慶 (신하경) は、「1920年代の日本婦人雑誌と『家庭小説』における女性像—菊池寛『受難華』を中心に」において、菊池寛の長編小説『受難華』の分析を通して、1920年代の日本の大衆消費社会の形成過程において、婦人雑誌が担当した社会的機能を扱った。徐東周 (서동주) は、「1930年代の植民地台湾の『日本語文学』と日本の文壇ジャーナリズム」において、1930年代の植民地出身の作家たちの「日本語文学」が登場する背景と過程を、当時東京留学中であった台湾の青年たちが結成した「台湾芸術研究会」と、その日本語機関誌『フォルモサ (Formosa)』の例を通して提示した。崔真碩 (최진석) は、「近代ロシアの知識の場と歴史哲学の論争—西歐主義の批評家の内面的肖像から」において、知識と近代社会の関係がどのように造形されるのかを見せてくれる事例として、いわゆる「ロシアの道」について西歐主義者たちとスラブ主義者たちの歴史哲学の論争を紹介した。李善珠 (이선주) は、「近代イギリスの雑誌を通して見たハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の社会進化論」において、スペンサーの核心思想を整理しながら、20世紀初の好戦的な軍国主義と優生学が、彼の思想をどのように政治に利用したのかについても分析した。

近代以後、ジャーナリズムと連係されることになった知識は、社会と時代に対する批判精神と実践性を発揮しながら、アカデミズムの変化を牽引してきた。この本は、ジャーナリズムとアカデミズムの相互浸透的力動性を念頭において執筆された。人文学の存立方式と有効性について多くの問いが投げかけられている21世紀において、このような試図は文学の場での実践過程にも少なからず示唆点を投げかけてくれるだろうと考える。